

栄光

説教・	
「見よ、神の小羊」	
松谷祐二牧師…1	
特集・戦後 80 年	
～平和への願い～	2
追悼・	
田邊裕子姉…	4
初夏の集い講演	
松谷祐二牧師…	5
初夏の集い報告…	6
ルデヤ会報告…	6
図書茶話会報告	
……………	7
長老のファイル…	7
牧師の寄り道……	8

『見よ、神の小羊』

イザヤ書 48 章 1 節～11 節
ヨハネによる福音書 1 章 29 節～31 節

松谷祐二

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。これは、喜びの叫びです。ヨハネはずつと予告してきました。「私の後から来られる方は、私にまさっている。私よりも先におられたからである」と。それは神、また「神の言」のことです。

この方は万物より先におられました。神と、神の言によって成されることを、誰も予め知り得ません。実際に神が事を起こされると、私たちは初めてそれを目にし、耳にし、これが神の御業だと知って、驚き、圧倒されます。それが私たちに良いこと、救いになることだと知られるとき、私たちは喜び、感謝にあふれるのです。

ヨハネは、この喜びと感謝にあふれて叫びました。「見よ、世の

罪を取り除く神の小羊だ」。私がずつと言ってきたのは、この方のことだ。私たちはこの方を待っていたのだ。私たちのために神が何をなしてくださるかを知って、私は嬉しい。この上なく嬉しい…。

ヨハネは、イエス・キリストを信じる者たちの代表です。ヨハネの喜びは、教会の礼拝に集う私たちも、同じように持ち得る喜びです。私たちの方へイエス様が来られるのを見て、喜びと感謝にあふれて、私たちは叫ぶ。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」。

これが喜びにならないとしたら、私たちは不幸です。私たちが、「もう知ってる」と思ってしまうときに、その不幸な事態が起こります。「キリストが十字架にかか

り、私たちの罪を負ってくださいました」——これは正しい知識です。しかし、「そんなの、もう知ってるよ」という顔でそれを口にできるなら、自分が口にしていることの本当の価値を知らないのです。

教会に來たことが無くても、キリスト教の学校を出たとか、本で読んだとか、関連する映画を見たとか、それだけで、「もう知ってる」ことになってしまっている人は多くいます。ヨハネのことを調べさせようと人を遣わしたエルサレムのユダヤ人たちも、「宗教の正しいあり方は、我々がもう知っている」と思っていました。

だから、ヨハネは言います。「あなたがたの中に、あなたがたの知らない方が立つておられる」。

ヨハネ自身はどうでしょう。「私はこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れる〔現される〕ために、私は、水で洗礼を授けに來た」(31節)。

ヨハネは喜び、感謝しています。「私も元は、この方(イエス・キリスト)のことを何も知らなかった。しかし、今は知ることができた。私のしてきた、水で洗礼を授

ける活動は、この方がイスラエルに現されるため、明らかに示されるために、神が私を遣わして行わしてくださいだったのだと分かった。こんな嬉しいことはない。」

その思いで、彼は叫ぶのです。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」。この宣言は、私たちも、喜びと感謝をもって叫ぶことの出来るはずのものです。「もう知ってる」ような顔さえしなければ。

「神の小羊」とは何か、ヨハネは詳しく説明していませんが、この一句だけでも、重大な宣言です。イエス・キリストが、単に私一人の罪ではなく、この世界の罪を、ご自分で背負った上で、除き去ってくださいさる。「世の罪を取り除く神の小羊」が、私たちにとって、どんなに切実に必要でしょうか。

「世の罪を取り除く神の小羊」イエス・キリスト、この方は、まさに今のイスラエルに対しても、世界に対しても、誰に対しても、現されるべきです。「神は独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(3章16節)からです。

(7月6日)

戦後 80 年

～平和への願い～

今年の 8 月で

戦後 80 年となります。

今も世界では戦争が続いており

ウクライナやガザなどでは

戦争で多くの人が苦しんでいます。

日本では戦争を体験した方が減るなか

平和のために私たちができることは何でしょうか。



広島平和記念式典に思う

杉本正和

今年の 8 月 6 日の広島平和記念式典には、過去最多 124 の国の参加がある。

毎年 8 月になると小学校の同窓生から電話が入ります。5 年生の時、広島市江田島から大阪に転校して、同級生に広島原爆惨状を話したからです。8 月 6 日になると、「杉本、元氣か！ 君が原爆で身内を亡くしたことが思い出される」と電話をかけてくれます。

昨年の夏、お墓まいをしました。江田島から広島市内のお寺さんに改葬しました。その時、小学校の担任の先生に会ってきました。吉田カズコ先生は 97 歳で健在です。

1945 年の終戦の時、私は小学 1 年でした。戦争で両親と妹を亡くした私と姉の当時を知る唯一の恩人であり、母親代わりでした。今日私が在るのは、先生のお陰です。4 年間の田舎生活の様子や小学校や親戚の様子を話してく

ださり、その都度初めて知ることが多々あって、驚きと感謝の気持ちで一杯になりました。

1972 年に一家 6 人で世田谷宮坂に引っ越してきました。家族は長男小 4、次男小 1、双子の姉妹 4 歳です。近所を散歩しているとき、経堂北教会を見つけました。一週間後、家族で教会を訪ねました。家内は牧師先生の勤めもあり、夜学の聖書神学校に通い、四竈牧師から受洗をして、教会学校の教師を 13 年間、奉仕しました。私は聖歌隊ファーストで、会社勤めと同じくらい、教会と聖歌隊が大切で大好きです。教会学校の校長を 9 年間奉仕して、社会人に大きく成長した CS の生徒たちと今もお付き合いが楽しいです。

思うに、四竈牧師は広島で中学 2 年の時、原爆体験をされました。神様から召命を受けて、神学校を選び、卒業されました。経堂北教会での説教では、その生い立ちが随所に溢れて、平和への道を示してくださいました。ノーモア広島です。戦争はしてはいけません!! 平和の君である神様の御名を讀え、世界平和をお祈りいたします。

平和な世界とは

河野紘典

私の勤務する中学校では、3年間かけて平和学習を行い、修学旅行では広島平和記念公園に行き、原爆資料館などを見学する学習を行なっている。3年間、平和学習に取り組む中で、ウクライナ戦争など、今世界で起きている出来事を取り上げてほしいという保護者の声が出てきている。確かにウクライナ戦争や中東の問題は、子どもたちにとって知っていて欲しいことではある。

しかし、平和学習を行う中で「平和」「戦争のない世界」という勘違いをしている生徒や保護者が時々いる。きつと生徒たちは、今、日本が戦争をしていないから、日本は平和だと思っているのである。戦争は過去のこと、テレビの向こうで起きていることと思っている。でも、私はそう思わない。戦争はなくても人種差別、ジェンダーに対する差別、思想に対する差別

別など、外傷は負わないが心理的な苦痛を与える攻撃がある。それがゆくゆくは戦争へと発展していく。この世界の課題は、いつの時代も根深く残っており、日本でも私たちの日常生活の中でその課題はリアルに存在する。

本当の平和な世界とは、とても尊いもので、いつの時代も容易に達成できるものではない。私は生徒たちに考えさせたい。平和な世界を築くためには自分の身近なところで何ができるのか、世界を大きく変化させることができなくても、自分の身の回りを変化させることはできるかもしれない。そして、その小さな変化が世界を大きく変化させる一步になるかもしれないことを。

全ての人が安心で安全な生活が送れるように、微力ながら生徒とともに私も考えて、行動していきたい。



戦後80年を迎えて

斉藤由美子

第二次世界大戦後、再びあの残酷悲惨な戦争が起きないよう国際連合が1945年に結成され、現在は植民地独立などにより加盟国は193ヶ国に増えた。この80年に戦争をしなかったのは、スイス、日本、ブータンを含む8ヶ国だけ。日本は世界初唯一の核兵器の被爆国で、日本被団協はその恐ろしさ、人類と共存させてはいけなさと長い間訴え続け、去年ノーベル平和賞を受けました。

今戦争をしている国とそこを援助している国が核兵器を持っているので、戦争が長引き追いつめられたら……。ほとんどの国民は戦争なんかしたくないと思っっている。こうでなくてはならないと互いに譲ることなく、「今だけ」「俺だけ」「金だけ」「何々ファースト」等の考えの国の為政者が制裁で従わせ略奪しているのを止めることができない。

1970年代ベトナム戦争の時、世界中に反戦運動が起き、フオークソングが流行し、終戦に役買ったことがある。人はもう戦争を止めることが出来ないのだから。

主を恐れ敬い、博愛共生の精神が広まり、互いを尊重し、平和な世界が来ますよう祈ります。

私は終戦2年後に生まれ、あらゆる物が不足していたけれど、世の中が復興に向かっていて、少しのことに感謝できた。電化製品は昭明の電球とラジオだけ。今は物があふれ、人の手を使わなくても機械がやってくれて便利になったけれど、そのエネルギー確保のため環境破壊が進み、気候変動が起こり、災害が増え、歯止めがきかない。次世代の人はどうなるのでしょうか。

今私は憂いているだけで何もしないで空しいけれど、神がなすべきことを導いてくださると信じています。

われに来よと
主は今やさしく呼びたもう
帰れや わが家に

戦争を知らない世代

澤田洋一

25年前、家族で知覚特攻平和会館を訪れました。「馬鹿な戦争をしたものだ」と義父が言っていたのを今でも強烈に覚えています。また終戦を広島で迎えた会員の杉本正和さんは「戦争がいかに悲惨なものか、戦争を知らない世代は分かっている」とおっしゃっていました。

私は昭和39年に生まれ、高度成長期、戦争が無い平和時代に育ちました。ウクライナ、ガザ等の報道を見聞きし、戦争の恐ろしさを感じていますが、戦争はいかなるものなのか、正直言って実感はありません。

今、祈祷会で創世記を学んでいます。善悪の知識の木の実を食べたから善悪を人間が判断するようになり、神から離れていった。「原罪」の意味は今まで良く理解できていませんでしたが、今は腹落ちしています。今の戦争を見ると人

間の根本的な罪深さを感じます。世の中で一番愚かな生き物は人間なのだと思います。人種、宗教、国家の違いで憎み合い、人間を殺し合っているのです。このままでは神様からリセットボタンを押されてしまうのではないかと。

戦争が終わり平和な世の中が実現することを祈るばかりですが、祈りを強力にするために過去を学ぶことが大切だと感じています。知覚で若き特攻隊員の遺書を読むと心が張り裂けそうになります。広島、長崎の平和祈念館も訪れました。長崎の平和祈念館の最後の出口に掲示されているのは焼け野原で少年が幼い弟をおぶっている写真です。幼い弟は既に亡くなっています。隣にオバマ大統領の平和へのメッセージがありました。

ニューヨークに留学した姪に生活の様子を聞きました。様々な国、人種、宗教の人が集まり、リスペクトし合ってバレーに励んでいるとのこと。ユダヤ人もパレスチナ人も昔は共存していたのです。

私も妻も戦争を知らない世代です。過去を学び、平和への祈りを強めていきたいと思っています。

追悼

伯母を偲ぶ

故・田邊裕子姉

伯母・田邊裕子は、大正、昭和、平成、令和の4つの時代、103歳の長きに渡る天寿を穏やかに全う致しました。この間、特に女性にとって困難な時期もあったかと思いますが。更に1942年という難しい時期の受洗が記録されています。

夫の故・信治伯父は大変優しい人で、二人仲睦まじく暮らしていましたが、22年前に一人住まいとなり寂しそうなときもありました。が、信仰に加え、教会や入居先の皆様、親族など周囲の方にも恵まれ、早く立ち直るのを見ておりました。入居先では趣味やイベントを通じて交遊を深めていました。教会での活動では、好きな編み物を通じたバザー貢献など大変精力的に活動し、のみならず葬儀で松谷牧師から様々な活動履歴をご紹介頂き感銘を受けました。ご

参列の皆様からも口々に敬慕のお言葉を伺えました。地方生活の必要からなんと（おそらく）40歳の頃免許を取得した得意の自動車運転（それもマニュアル車！）で80歳近くまでお仲間とご一緒したりも。その後もタクシー等で礼拝出席を欠かさず、足を悪くしてから難しくなりましたが、強い信仰心を持ち続けておりました。

皆さん仰いますように伯母はとても穏やかで優しい人でした。私は子どもの頃、隣家や静岡の家へ頻繁に遊びに行き可愛がってもらったものです。人の悪口を聞いたことがありません。冒頭に記したような難しい時代の思い出についても「〇〇だったのよ、やあねえ（笑）」などと明るく話をするばかりでした。信徒でない私には計り知れずまた語る資格はございません（ご寛恕ください）が、胸の中に抱かれた、イエス様とその教えを大事にしたった堅い箱を思い浮かべることができます。

棺には編みかけの毛糸を入れさせて頂きました。天国でいつものすばらしい編み物をきつと完成させてくれましょう。（甥・田邊靖）

初夏の集い

『伝道について 語ろう!』

松谷祐二牧師

なぜ伝道するのか。イエス様のご命令からです（マタイによる福音書28章18〜20節）。それに弟子たちが従う中で教会ができ、後の教会もそれを続けたので、日本にも教会が生まれました。

日本では伝道が難しい、とずっと言われてきている中で、一度立ち止まって考えます。どうすることが本当に「伝道」なのか。イエス様の命令は、「すべての民を弟子にしなさい」ということでした。

「伝道」とは、「弟子にすること」です。「お客さんを集めること」ではないのです。何とか少しでも来てほしい、と思いますし、初めて来た方は、お客さんのように特に歓迎します。でも、いつまでもそうではありません。教会は客にサービスを提供するところだと、世間は見るかもしれません。本当はイエス様の弟子の集まりで、お客さんはいない。何かサービスし

てもらう人たちではなく、むしろサービスをしよう、イエス様に仕え、イエス様の教えに従って生きよう、とする人たちの集まりです。では、弟子というのは、「イエス様が言った通りに生きなきゃいけない」、と義務感で生きていくのか。それではとても続きません。イエス様が、私のようなものを弟子としてくださったことを嬉しいと思い、喜んでいればこそ、長く歩み続けることができます。

伝道は、弟子になるように人々を招くことです。招く側の人、「自分がイエス様の弟子であることは素晴らしい」と思っているかどうか、まず大事なはず。「イエス様の弟子である」ということを、どういう形で表すか。多分、ここはいろいろな考えがあるでしょう。活発な社会参加を重視する人もいます。しかし、私の考えでは、どんな人にもできる、根本的な弟子の形、イエス様にお仕えする者の形は、「礼拝する」ことだと思っています。だから教会の制度では、礼拝に出る人を教会員と見なしています。弟子として人を招くということは、「一緒に礼

拝しようよ」と言うことです。私たちが今日も捧げた礼拝、ここに一緒に入ってもらおう、というのは、かなり難しいことです。初めての人が礼拝に出るのは勇気のいることだし、一回出ただけで良さが分かることも滅多にない。礼拝は、良さが分かるまでに、「そこでイエス様、神様にお会いできるんだ」と気づくまでに、繰り返し参加することが必要な、時間のかかる性質のものだと思います。

そこにいかにして人を誘えるのか。コンサートとか、何らかの楽しい、普通に誰でも参加できるイベントを企画しても、そこに来る人たちは、あくまでお客さん、消費者の意識で、来て帰ります。若い人たち、日々スマートフォンで何でも情報が入り、面白い動画を次々に見ることを心の慰めにしてる人たちには、10分を超えたら長すぎて耐え難い、と感じられても無理はありません。

特効薬とか得策、これをやれば絶対いけます、といったものは、はっきり言って無いです。なら、どうしたらいいか。「弟子になる喜び」の伝達、時間がかかるそれ

を、どうしたらできるか。

教会に来てもらいたいと思う相手と、私たちが、ずっとお付き合いたいと思いませんか。友達、同僚、近所の付き合いでも、遊び仲間でもいいです。一度きりではなく、繰り返し時間を共有する人に、自分がイエス様の弟子として生きている喜び、それが何より楽しい、嬉しい、仕事を調整してでも教会に行きたい…その姿を見せることができればいいです。話すか、態度で示せば十分、十二分です。「そんなに大事なものがあるのか」「この人がそこまで言うなら」と思ってもらえる、かもしれません。結局、そこにしか可能性は無いと思います。これが私の考える、現実的な、しかし気の長い、伝道です。



初夏の集い報告

6月22日礼拝後、松谷先生は約60名の出席者に向けて「伝道とは何か」とお話ししてくださいました。

伝道とは、教会とは、お客さんを多く集めるということに注視すべきではない、教勢の増減の本質はイエス様の弟子になっているか、ということ。教会は弟子が集まる場所であって、サービスを提供する場ではないということ。長老だから、教会員だからといった義務感で集まるのではなく、弟子として「喜び」を持って歩んでいるか。礼拝を大切にし、御言葉を繰り返し聞き、その場を与えられたことに感謝する。生活の一部として教会に行き、喜びをもって同じ時間を共有する家族、友人に神様の御言葉のすばらしさを伝えていくことが伝道とお話しくださいました。

質疑応答では皆さんから、伝道に対する難しさ、感じている苦しさや思いをお聞きすることが出来ました。家族への伝道が一番難しい、と涙を流してお話しくださった方も。でも先生は、自分に弱さを

感じたとしても決して「悲しみ過ぎないこと」と励ましてくださいました。またご自身のお話として、教会と距離を置き神様と向き合えずにいた時期があり、それでも神様はとらえていてくださって、また教会に足が向くようにしてくださったこと、そこに喜びや驚き、導きがあるのだ、と過去を振り返って証してくださいました。

私たちにとって教会とは、伝道とは何か。時に立ち止まり、考えを巡らせ、日々の暮らしの中で神様の高さ、広さ、深さに思いを深め、自分ごととして伝えていくこと。目の前の数字にとらわれず、最も大切な神様の愛を私たち自身が、枝となって伝えていくことが出来るように励まされたひと時でした。明日、来週、来年、そして何年か後の花を楽しみに少しずつ種まきをして、お水を注いでまいりたいと思えるすがすがしい初夏の集いのひと時でした。

(牧内美和)

ルデヤ会報告



6月26日、松谷先生を迎えて初めてのルデヤ会例会を開くことが出来ました。コロナ禍前からルデヤ会や例会の持ち方をどのようにするかは課題であった旨、あらかじめ先生にご相談していました。

松谷先生は使徒行伝16章1節～15節の、ルデヤ会の名称の元になったリディアの箇所を選び、話を始めてくださいました。

ルデヤ会は全国的には婦人会という集まりです。前任の教会の状況も交えながら「そもそも婦人会の存在の意味合いは何だろう」と問いかけてくださいました。婦人会の役割が愛餐会のお世話やバザーの食事作りなど、昔婦人が家庭の中で担ってきたことを果たすためとするならば、ジェンダー問題の観点からも次の世代に継承していくことは難しいこと、交わりとしては男性も加えていくことを視野に入れても良いのではと話され、会員の意見を求められました。色々な話の中でこれまでの豊かな交わりと活動の変遷を振り返

り、ナオミ会の活発な楽しい交わりの話も伺うことが出来ました。

現在、バザーや愛餐会などではそれぞれの委員会が立ち上がり、すでにルデヤ会の役割は無くなっています。また、コロナ禍で活動できなかった期間には、聖書の学びは教会としての聖書研究祈祷会で可能、などの理由で例会は中止し、講演会だけになっていました。

西南支区婦人部委員長・河野姉からはルデヤ会・西南支区・東京教区・全国婦人会連合が負担金などで繋がっていることが改めて伝えられました。ご自身当初は婦人会を無くしても良いかと考えていたが細々とでも続けていくことが御心なのかも、と思い直して前向きに活動を続けておられます。

ルデヤ会は教会員同士の交わりを育てていく意味でも大切、講演会なども面白かった、元気を出して活動していくと良い、など前向きなご意見もいただきました。

色々な思いを伺うことが出来た有意義なひと時。26名の参加でした。これからの在り方をまた皆さんとご相談しながら考えていきたいと思いました。

(小嶋幸子)

図書茶話会報告



7月第一週の礼拝後、図書茶話会を開催し、22名が参加する中、松谷先生に本にまつわるお話をいただきました。

まず、先生が子どもの頃に読まれていた本というテーマから始まりました。子どもの頃には、ご家族で家庭礼拝をする際、聖書物語などの本を読んで語り合う、という生活をされていたそうです。キリスト教以外では、『おさるのジョージ』の元である『ひとまねごころ』などの本を音読して、言葉も本から覚えた、とのことでした。

次に、キリスト教教育についてのお話をされました。幼稚園や学校と教会は全く違い、キリスト教を次の世代に伝えていくのは非常に難しいため、前任の教会幼稚園ではとにかく聖書の話をつかりやすく、演技も交えながら話すことに努められたそうです。繰り返し聖書の話することが重要、と強調されていました。

先生は本を書かれないのですか、という問いかけに、ご自分で

本を書かれるお気持ちはないとのことでしたが、「聖書自体に価値があり、クリスチャンとしては、聖書をよく読んで、どんな内容かを自分の子どもたちや身近な人に語れるようにしておいた方がよいと思います」と話されたことが印象的でした。

その後も、先生の好きなジャンルの本、受洗をした人にお祝いとして渡せるキリスト教の手引書などについて、参加者から松谷先生に対する質問があり、活発な意見交換がなされ、有意義な時となりました。

教会図書取組みについては、本を読む時間が取れない中で教会員に図書を勧めるのであれば、レビューやチラシの発行、図書の配置なども考えた方がよい、とのアドバイスをいただき、図書委員会としても学びの多い会でした。

茶話会では、希望の図書は購入して貰えるのか、というお声もいただきました。図書委員会では、茶話会で取り上げられた本も含め、教会員の興味のある本を揃えていきますので、ご希望は委員にお伝えください。(門田浩)

長老のファイル



松谷先生が就任されて4か月、長老会では活発に話し合いが進んでいます。岸先生時代からのことを確認しながら検討し決定していきます。外階段の扉の修理、検討申し送りになっていた礼拝堂や1階のフロアタイルの張替えは見積もりを取って着手します。夏になると暑さが厳しかった奏楽者席・司式者席は扇風機などの導入が決まりました。

「教会案内」のパンフレットは伝道委員会の働きで松谷先生と内容を見直してリニューアル。出来上がりが楽しみです。

新設のデジタル委員会の提案で、信頼できる新たなドメイン(インターネット上の住所)を取得しました。教会公式メールアドレスも新しくなりました。変化に戸惑いを感じる方もおられるでしょうが今迄のものもまだ使うことは可能なのでご心配は要りません。慌てずに登録をお願いいたします。

伝道委員会主催の「ハッピーアワー」は、秋に久々に開催予定です。

ミニバザーには喫茶コーナーを設ける予定です。各担当が新しい風を受けて知恵を絞り、少しずつ活動を広げて教会員の交わりを深め、教会が元気に伝道していけるように動き出していることを感じます。

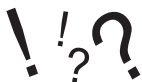
「初夏の集い」と図書茶話会は松谷先生が講師でした。教会員の多くが先生のお考えを知りたいとの思いで参加し、実り多い時を過ごすことが出来たように思います。

コーヒアワーも定着。礼拝後、和やかにお茶を飲みながら語り、次の活動までホッと一息の時を過ごす様子に、これもまた新しい風がきっかけと感じています。

牧師の夏期休暇中に長老が奨励(信徒による信仰の奨め)を行うことには衝撃と動揺が走りまわりました。それでも無牧の教会では当たり前の役割。大西長老が初の奨励を引き受けてくださることになり、皆がその覚悟を持つ、身の引き締まる思いになりました。神様と聖霊のお助けを信じ、祈りをもって臨むしかありません。どうぞ御心に適う時となりますよう、皆様も祈り、お支えください。

(小嶋幸子)

個人消息



掲示板



- ミニバザー 8月3日(日) 礼拝後
- 牧師夏期休暇 8月1日(金)～7日(木)
- CS夏期キャンプ 8月15日(金)～16日(土)
高尾の森わくわくビレッジ
- 振起日礼拝 9月7日(日) 上野峻一教師
(東洋英和女学院中学部・高等部教諭)

編集後記



▽先日、モデル・報道写真家のリー・ミラーの映画を観た。従軍記者として強制収容所等を撮った彼女は、戦後心の傷に苦しみ、息子にも戦中の話をしなかった。彼女の死後、息子が戦中の写真を発見し公開したそうだ。後世に語り伝えていく難しさ、大切さを感じた。(酒井)

「栄 光」2025 年 8 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧 師：松谷祐二
編 集：栄光編集委員会
Email：church@kyodokita.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp

牧師の寄り道



子どもの頃から、8月は戦争と平和のことを考える季節なのだと、何となく思ってきた。社会科の教員だった親の影響もあるし、テレビでは関連の特集やニュースが流れる。そのおかげで、自分に戦争体験がなくとも、戦争の悲惨さについては想像力を働かせることができた。

しかし近年は違う。8月を待つまでもなく、戦争と平和のことを考えない日は無い。テレビで日本のニュースではなく、通訳付きのワールドニュースを毎日見ていると、そうなる。説教や祈禱会のテキスト、交読詩編に「イスラエル」の語が出るたびに、緊張する。聞き手が何を思うだろうか。その言葉をどう捉えるべきか、正しく伝えることができるだろうか。

戦争と平和のことを考えない日は無い。そして、単純な答えが到底出せない。何が本当に正しい情報かも、定かではない。日本で平和主義を唱えるのは簡単だが、現

に戦争の渦中にいる人々の感情を思うと、時に不道德ですらあり得る気がする。日々殺されていく人々からすれば、「早く武器を持って助けに来てくれ。敵を攻撃してくれ」と叫びたいではないか。かと言ってその通りにしたならば、もつと戦火が拡大し、もつと多くの人が死ぬのではないか。いや、それを避けるために数万人が殺されても見過ごすのか。

私は、説教の中で、現実の国名を挙げて戦争や平和のことを直接的、具体的に語ることはめつたに

逃げているつもりはない。ある意味では、毎週必ず、平和のことを語っていると確信している。この世の「平和」の本当の基礎は、キリストを信じて罪を赦され、神との平和を得ることだからだ。

(松谷祐二)